

平成二十五年 六月三〇日発行
三重大学 日本語学文学第二四号 抜刷

式亭三馬年譜稿（一）

—安永五年から文化四年まで—

吉
丸
雄
哉

式亭三馬年譜稿(一)

—安永五年から文化四年まで—

吉丸雄哉

凡例

著者・画工・版元の名前は通称を採った。原本の記述どおりではない。人物の代目は生没年でおおよそわかるものなので、記していない(歌川豊国など)。題名とその読みは基本的に原本表記に合わせた。よつて題名とその読みが『国書総目録』や『日本古典籍総合目録データベース』と齟齬することがある。文化初年までの黄表紙は巻数は記さず、冊数のみ記した。

安永五年、一七七六、丙申 一歳

○江戸浅草田原町三丁目に、家主菊地茂兵衛の長男として生まれる。姓は菊地、名は太輔、字は久徳、俗称西宮太助。父茂兵衛は八丈島の為朝大明神の祠官菊地氏の妾腹の嫡子だった。晴雲堂を号とする板木師でもあった。

『鬼児島名譽仇討』など文化五年刊の西宮新六版合巻の巻末。『古今百馬鹿』(文化十一年刊)の春亭三暎跋文。『女房氣質異赤繩』(文化十二年刊)の春亭三暎序文。以上の資料によってわかる。

天明元年、安永十年四月二日改元、一七八一、辛丑、六歳
○実弟石渡平八(幼名左之治郎。本名左助。石渡利助(上総屋利助)家に仕え、三浦屋平八家に養子)出生(『式亭雜記』)。

天明四年、一七八四、甲辰、九歳

○この年冬より寛政四年十七歳の秋まで書肆翫月堂(本石町四丁目)に養われた。翫月堂は俗称堀野屋仁兵衛(旧姓小倉屋金兵衛再改家号為堀野屋)で三馬の(二番目の)妻の父(洒落本『誰が袖日記』の三馬識語より)。

寛政四年、一七九二、壬子、十七歳

○秋まで翫月堂堀野屋仁兵衛に奉公。『戯作六家撰』に幼少から独立までの状況の記述あり。

寛政五年、一七九三、癸丑、十八歳

○戯作の執筆の開始。『敵討安達太郎山』「十八才の春よりけさくしやとなり」。

寛政六年、一七九四、甲寅、十九歳

○正月、処女作となる左記の黄表紙二作を刊行。

『天道浮世出星操』(三冊、歌川豊国画、西宮新六板)

『人間一心視替操』(二冊、歌川豊国画、西宮新六板)

寛政七年、一七九五、乙卯、二十歳

○正月、四季山人の名で黄表紙『姉ハ宮城野』(五冊、歌川豊国画、西宮新六板) 刊行。

『姉ハ宮城野』(五冊、歌川豊国画、西宮新六板)

○独立から寛政七年までは「草堂」暮らし(場所と実態は不明)(棚橋正博『式亭三馬』)。

寛政八年、一七九六、丙辰、二十一歳

○『姉ハ宮城野』敵討白石噺」と題する、前年寛政七年刊の黄表紙

『碁太平記白石噺』を前編三冊、後編二冊に分けた黄表紙が刊行されたと思われる。寛政八年版は後編二冊しか現存しない(黄表紙総覧)。

○『哆囉哩楼』の号を寛政十年から使用することから、寛政

八年か九年に、数寄屋橋外山下町の書肆万屋太治右衛門の婿養子になったと考えられる(棚橋正博『式亭三馬』)。

寛政九年、一七九七、丁巳、二十二歳

○正月、左記の黄表紙を刊行。

『芝全交夢寓書』(三冊、歌川豊国画、和泉屋市兵衛板)

『唯頼大悲智慧話』(三冊、歌川豊国画、和泉屋市兵衛板)

『明成(おやおや)』如癡呆唐本喰噺』(三冊、歌川豊国画、西宮新六板)

○この頃、万屋太治右衛門に養子に入ったと考えられる(棚橋『式亭三馬』)。

○当年刊の黄表紙『長生譜合(ながいきうけい)』悖入宝山吹』(三冊、樹下石上作、歌川豊国画、西宮新六板)に序する。

○黄表紙『噺八百万神一座』(二冊、楽山人馬笑(楽亭馬笑)作、歌川豊国画、和泉屋市兵衛板)は、式亭三馬関ならびに三馬序。

寛政十年、一七九八、戊午、二十三歳

○正月、下記の黄表紙刊行

『京鹿子(きょうかのこ)』其跡幕婆道成寺』(三冊、歌川豊国画、西宮新六板)

『江戸紫(えどむらさき)』吾婦街道女敵討』(三冊、歌川豊国画、新井柔術)

西宮新六板)

『人間一生(にんげんいつしやう)』磨淨玻璃心照子』(三冊、北尾重政画か、善悪正(ぜんあくじやしやう)

西宮新六板)

『三角書箱(さんかくゆきおんな)』腹鼓臍臍曲』(三冊、歌川豊国画、和泉屋市兵衛板)

○春、洒落本『石場妓談(せきだん)』辰巳婦言(喜多川歌麿画一冊)刊。

○現存する絵題簽(絵外題集)より、この年も寛政七年初板の黄表紙『碁太平記白石噺』の再板本が出版されたと考えられる。

寛政十一年、一七九九、己未、二十四歳

○正月、左記の黄表紙刊。

『夫嘯氣』(そはくすのき) 俠太平記向鉢巻』(三冊、歌川豊国画、西宮新六板) (画工は北尾重政説もあり)

『引返譬幕明』(ひきかえしなまのあき)

○正月、洒落本『引返譬幕明』(三冊、北尾重政画、西宮新六板)

『客物語』(きやくものがたり)

○『似貌』(にがは) 俳優楽室通』(二冊、自画、版元不明) 刊。

『絵本』(えほん) 俳優楽室通』(二巻一冊、歌川豊国・国政画、上総屋忠助板) 刊。

○正月刊、楽亭馬笑作、式亭三馬補正の洒落本『廓節要』(二冊、版元不明) に序文を寄せる。広告に『俳優楽室通』があるのので、上総屋忠助か。国会図書館所蔵の袋には三馬の印の模様を入れ、「式亭三馬著」と記し、三馬作にみせかける。

○正月刊の黄表紙『品川鯉児』(しながわのこくじら) 無間鐘梅枝伝譜』(三冊、山東京伝作画、西宮新六板、天明七年刊『座名』(まゐり) 梅枝伝賦) の改題再板本) に序する。

○本年刊の洒落本、戲家山人『遊子』(ゆうしん) 仲街艶談』に「山東住息子」の署名の序文を寄せたとする(中野三敏「傾城買二筋道」板本考)。

○本年刊『狂歌東西集』(三陀羅法師撰) に狂歌十六首が入集。以後、享和三年ごろまで千秋連との関わりが深い。

○桜川慈悲成編の喃本『恩の掛金』に序文。

○狂歌俳諧集『今日歌白猿一首抄』(烏亭焉馬編、上総屋利兵衛板)

に狂文半丁と狂歌一首「龍宮で言ひ廻したる猿よりもぎものつぶれた口上の入り」を収める。

○当年刊の黄表紙『金春徳和家隠居』(三冊、樹下石上作、歌川豊国画、和泉屋市兵衛板) に「価千金の春於目出亭三馬叙」と序文。

○『引返譬幕明』『俳優楽室通』『廓節要』に故人芝全交の狂名を譲り受けたが未熟のため改名していない旨を記す。

『廓節要』、「一寸お断申上ます、式亭三馬儀古人芝全交の遺言に付、此度より二代目の全交と可相成筈に候へ共、

いやしき妄作を以て古人高名をけがすとは恐れ有と存、

いまだ改名は不仕差ひかへ罷在候、猶不相替全交佛と被

思召候御一笑奉希儀」

○十返舎一九作画の狂歌絵本『十廻松』(二冊、村田屋次郎兵衛板) に狂歌一首「たなはたは今宵妻乞ふ鹿ならてもみちのはしを

ふみわけて逢ふ」収録。内容は江戸における一年の風俗の絵

を見開き一面に各月毎に描き、各々一首ずつの狂歌を載せた

もの。千秋連の狂歌絵本である。

○火消人足の喧嘩を太平記に見立てた『俠太平記向鉢巻』のた

め正月五日に板元西宮新六とともに打ちこわしにあり、手鎖

五十日となった(『近世物之本作者部類』、『伊波伝毛乃記』)。(寛政紀

聞)では西村方へ正月二日のこととし、打ち壊した者は入牢、西村と作者

三馬が手鎖の上所預かりになったとする)。南和男「江戸の町奉行」

(吉川弘文館、平成一七)が「御赦例書」六から事件の経緯や事後

を紹介する。寛政十一年ごろ、三馬のことを「青物町六右衛

門店喜兵衛」と記しており、喧嘩の負組「よ」組の首謀者が敵のうえ、十七年も江戸払にあつていたことや、勝組「に」組からも草双紙の販売を請け負う「堺町家持新兵衛、同町家主利兵衛」へ打ち壊しを行ったとする。注目すべきは当時の三馬を「作者青物町六右衛門店喜兵衛」と記すことである。三馬が「喜兵衛」と名乗った例もきかず、文化十二年の文書のため、誤りの可能性も高いが、打ちこわしに万屋があつたことを示す資料がないので、寛政十一年では記載のとおりに住所におり、まだ万屋に婿入りしていない可能性も考慮すべきだろう。

○『俳優細見記』(冬溪子作、榎木屋吉兵衛板)が三馬作か(棚橋『式亭三馬』)。

寛政十二年、一八〇〇、庚申、二十五歳

○三馬の(二番目の)妻の父である甞月堂堀野屋仁兵衛死去(三馬旧蔵東大霞亭文庫本『栄花遊二代男』識語)。

○前年の筆禍事件のため著作はなし。

○馬琴の『伊波伝毛之記』には「寛政中山下町なる書林万屋太次衛門が婿養子となりし」と記す。万屋太次右衛門の婿養子になつたのが三馬の初婚である。享和二年刊の黄表紙『綿温石奇功報条』『封鎖心鑰匙』に、万屋が登場するので、馬琴の言葉にしたがい、下限はこのあたりだと考えられる。筆禍事件により、戯作をいちどあきらめ、この寛政十二年に書肆に

入婿した可能性もある。

○千種庵霜解の撰による『狂歌花鳥集』(二冊、前川六左衛門・若林重左衛門・山中要助板)に三首入集。千種庵霜解は浅草側の狂歌師で、山中要助のこと。

享和元年、寛政十三年二月五日改元、一八〇一、辛酉、二十六歳

○晰本『花間笑語』(上総屋利兵衛板)に序文。

○正月、左記の黄表紙刊行。

『御狂子』(五蝶夢) 式亭三馬自惚鏡』(三冊、歌川豊国画、西宮新六板)

『鼻毛二尺』(はなげさんじやく) 日本一癡鑑』(三冊、歌川豊国画、和泉屋市兵衛板)

○春、役者絵本『俳優三階興』(二巻二冊、歌川豊国画、西宮新六・万屋太次右衛門板)刊。

享和二年、一八〇二、壬戌、二十七歳

○正月に左記の黄表紙を刊行。

『又焼直』(またやきなおす) 稗史億説年代記』(三冊、三馬画、西宮新六板)

『御覧親孝経』(三冊、歌川豊国画、山口屋忠右衛門板)

『彼ハ奉納曲』(かははほうのうがく) 封鎖心鑰匙』(三冊、歌川豊広画、西宮新六画)

『自先達』(さきだつてより) 綿温石奇効報条』(三冊、歌川豊広画、和泉屋御吹聴画)

市兵衛板)

○正月、四季山人の名で洒落本『船頭深話』(二巻二冊、版元不明)を刊行(棚橋『式亭三馬』)。

○本年刊の風俗絵本『絵本時世粧』(二巻二冊、式亭三馬閨、歌川豊国画、和泉屋市兵衛板)に序文二つ載せる。豊国の跋文も三馬の校閲が入るか。

○正月刊、黄表紙『武茶尽混雑講釈』(三冊、楽亭馬笑作、勝川春喬画、西宮新六板)は、式亭三馬校閲で、三馬が序文を記す。

○役者似顔絵本『俳優卅二相』(東子橋客著、歌川豊国画、堀野屋仁兵衛・葛屋重三郎板)が三馬の作品であった可能性があるとする(棚橋正博『黄表紙総覧』)。

○本年刊、千秋連の狂歌絵本『五十鈴川狂歌車』(三陀羅法師編、葛飾北斎画)に肖像画と狂歌一首。

享和三年、一八〇三、癸亥、二十八歳

○この年四月から六月まで流行した麻疹に罹る(『麻疹戯言』跋文)。

○桜川慈悲成編の喃本『遊子珍学問』(栄松斎長喜画、大和屋久兵衛板)に洒落堂主人の名で序文。

○正月、『戯場訓蒙図彙』(八巻三冊、歌川豊国・勝川春英画、永楽屋東四郎・勝尾屋六兵衛・普屋善助・石渡佐助・西宮新六・万屋太次右衛門板)刊。狂歌一首も収める。

○式亭三馬編の『狂歌鱸 初編』(二冊、万屋太次右衛門・鉛屋安兵衛・河内屋太助・永楽屋東四郎・石渡利助・葛屋重三郎板)刊。主版元は万屋。鉛屋以下は「売弘書林」。三馬自身も「戯作者之部」に名を連ね、狂歌十首および印譜を載せる。万屋太次右衛門に三馬印が捺されていることから、この年に三馬は万屋太次右衛門と名乗っていたと思われる。

○この年四月から六月まで江戸に麻疹が流行する。麻疹の流行にあわせて滑稽本『麻疹戯言』(二巻一冊、万屋太次右衛門板)刊。見返し上部に「癸亥孟夏新鑄」とあるが、三馬も五月端午に麻疹にかかった(『麻疹戯言』跋文)ので、際物出版とはいえず、四月(孟夏)刊行ではないだろう。鹿部部真顔が序文を寄せており、当年刊の『狂歌鱸 初編』とともに三馬の四方側狂歌壇との交友関係がうかがえる。

○『日本小説年表』は『式亭 紅破皿南京焼餅』(黄表紙、三冊、歌川豊広画、和泉屋市兵衛板)と『芝全交寺 戯作本尊 該如来万八縁起』(黄表紙、三冊、歌川豊広画、和泉屋市兵衛)がこの年刊行されたとするが実際の出版はなされなかったものと考えられる。享和三年刊の和泉屋市兵衛板の黄表紙『敵討安積車』など巻末の出版目録に、名前が記載されていることによる。同書の書名は寛政十一年の西宮新板目録に名前が載るが、『挾太平記向鉢巻』の筆禍で途絶え、改めて和泉屋から注文を受けたが、これも未刊に終わったと考えられる(黄表紙総覧)。

○閏正月朔日に本所一ツ目橋際尾上町京屋にて烏亭焉馬の六十の賀宴が開かれる。三馬も出席し読み上げられた狂文を書きとめ、これが翌年刊行の『狂言綺語』のもとになる(『狂言綺語』序、および『細推物理』)。

○九月七日、狂歌堂真顔の駿河行の別宴に出席する。他に出席者は南畝・馬場金埒・花江戸住・烏亭焉馬(『細推物理』)。

○三馬門人福亭三笑の正月刊の黄表紙『美濃近江(みのおうみ)盛衰栄枯(せいすいせいこ)』かまろ寝(かまろね)物語(三冊、歌川豊広画、和泉屋市兵衛板)に序する。一丁裏二丁表に福亭三笑の先生としてと差し向かいで描かれる。

○本年ごろに成立した艶本『恋の楽室』(歌川豊国画)序文(完本はイギリス個人蔵)の「好亭主人」が式亭三馬か(松葉涼子氏教示)。

文化元年、享和三年二月十一日改元、一八〇四、甲子、二十九歳

○この年も病気がちで戯作を控え気味であったとする。病中の慰みとして十月に黄表紙『名代(なしろ)訓歌字尽(くんかじり)』を執筆(文化二年刊の黄表紙『名代(なしろ)訓歌字尽(くんかじり)』の板元口上)。

○景物用の黄表紙『名代のあぶらや』(二冊、歌川豊広画、虎屋宗三郎板)刊。江戸通四丁目中橋の化粧品店虎屋宗三郎のための景物本。当年の正月二十四日に執筆した。

○狂文集『狂言綺語(きやうげんぎよ)』(二巻二冊)刊。上巻題簽に「談洲楼焉馬編」、目録にも「烏亭焉馬著」とある。上巻は烏亭焉馬の報條文に、前年の烏亭焉馬六十の賀宴に参加の人々が読んだ狂文

を足して構成する。下巻の題簽は「遊戯堂三馬編」、目録には「式亭三馬著」と記される。下巻は三馬の報条文を集めた内容である。無刊記本がほとんどだが、京都大学附属図書館中院文庫に西宮新六と万屋太次右衛門を版元とする本がある。

○正月刊、黄表紙『万福(まんぷく)』宝蔵開(たからひらき)』(三冊、樹下石上作、歌川豊広画、和泉屋市兵衛板)に狂歌一首が載る。

○八月刊の『狂歌巨月賞(きやうかこげつしょう)』(秋長堂物梁編、秋長堂藏版)に狂歌一首。○「仍て文化元年より其家(甞月堂堀野屋仁兵衛)の後室を養ひ、後其娘を妻とし今尚存せり、此家は二代目仁兵衛相統して後、文化元年本石町の家類廃すと見えたり」(『誰が袖日記』三馬識語『日本小説年表』)。寛政十二年に初代仁兵衛が亡くなったあと、その息子が二代目仁兵衛となる。文化三年刊『賀茂翁家集(かまのおきな)』まで、出版の事業が認められるが、享和三年刊『俳優觸(はいゆうさ)』を最後に、実質的な出版業を終えていたか。いずれにせよ、堀野屋仁兵衛の未亡人に経済的援助をこの年から始めたのだろう。

○本年刊『五百崎虫(いほひさきむし)の評判』(烏亭焉馬編、版元不明)「開口」によれば、三升連中(白猿後援会)、蜀山人、鹿都部真顔、馬場金埒らと、虫評判に参加したとする。虫評判は前年のことだろう。

文化二年、一八〇五、乙丑、三十歳

○正月、左記の黄表紙刊。

『名実聖法(なみじつせいほう)』滑稽妙難(かじやくみょうなん)』(まじめせいほう) 親譬勝膏葉(おやのかたぎょうちゆうやく) (三冊、歌川豊広画、西宮新六板)

『二人娘（ひとりむすめ）』（二冊、歌川豊広画、和泉屋市兵衛板）
『調歌字尽』（三冊、歌川豊広画、和泉屋市兵衛板）

○五月下旬、『狂歌鱧 後編』の草稿を仕上げる（序文）。

○本年刊、便々館湖鯉鮒編『狂歌袖玉集』に序文。

○『狂歌鱧 後編』の自序から文化二年五月末の時点で、「ふみの屋のまどのもと」（万屋）にいたことが確認できる（棚橋『式亭三馬』）。ただ文化元年刊の『狂歌武射志風流』初編（都立中央図書館東京誌料本）刊記に山下町の「万屋太次右衛門」と並んで「江戸四日市 万屋太助」の記述が認められる。「江戸四日市」は三馬が万屋を離れたあと住んでいた「日本橋十九文横町」（『戯作六家撰』）。よって、万屋に入婿したものの、入婿さきの妻が亡くなり、万屋との関係が疎遠になり始めたのが、すでに享和三年のうちだった可能性もある。このほうが、翫月堂の未亡人に文化元年から経済的支援を始めたことと道理があうが、国立国会図書館本『狂歌武射志風流』初編は「万屋太次右衛門」のみを版元としており、都立中央図書館本が後刷で刊記に「万屋太助」を加えたのであれば、やはり三馬は文化二年まで万屋にいたという結論になる。

文化三年、一八〇六、丙寅、三十一歳

○この年、左記の黄表紙刊。

『浅草観音（あさくさかんのん）』（十卷二冊、歌川豊国画、利益傳尉（りやくのあだうち））
『雷太郎強悪物語』（十卷二冊、歌川豊国画、西宮新六板）
『敵討安達太郎山』（五卷二冊、歌川豊広画、西宮新六板）

式亭三馬年譜稿（一）

○正月、左記の滑稽本刊。

『小野篤謙字尽』（二冊、上総屋忠助板）
『小野篤謙』（なまといかた）
『酔酩気質』（二巻二冊、歌川豊国画、石渡佐助（上総屋佐助）板）
『戯場粹言幕乃外』（二巻二冊、歌川国直画、山城屋藤右衛門か山田佐助板）
『戯場粹言幕乃外』の版元は山城屋藤右衛門か山田佐助（神保五彌、新大系八六）。広告から西村屋与八も関係した可能性をみる（棚橋『式亭三馬』）。

○正月、『狂歌鱧 後編』（二巻二冊、三馬編、万屋太次右衛門・万屋太助・著屋善助・河内屋太助・永楽屋東四郎・鳶屋重三郎板）刊行。享和二年の『狂歌鱧 初編』の続編。著屋善助以下は販売元。主版元は万屋太次右衛門と万屋太助。万屋太助が三馬のこと。

『諸連判者之部』「酔竹側判者之部」からなる。

○正月の桜川の晰初めの会の翌日、烏亭焉馬の家で『江戸嬉笑』（二冊、楽亭馬笑・福亭三笑・古今亭三笑作、歌川国輝画）の序を書く（『江戸嬉笑』序文）。作者の三人は三馬門人。三馬は行司役で評言も載せる。『江戸嬉笑』の刊年は文化四年か。

○三月四日、芝高輪牛町より出火のをりから、日本橋十九文横町の寓舎も類焼して、年来の蔵書、あまた烏有となりぬ（『式亭雜記』）

○柳斎主人にいざなわれて北総佐原に数ヶ月間逗留し、潮来にも一日遊ぶ。潮来での遊樂の後船中で想をおこし、発端を編み、北総佐原の万葉堂で凡そ五日かけて『潮来婦誌』を脱稿した（『潮来婦誌』序、附言）。

五一

○柳齋主人の佐原の家で、六月中浣までに『阿古義物語』の開場から第三回までの稿を仕上げた(『阿古義物語』序、述意)。

○当年刊の長唄本『東風流 初編』(伊賀屋勘右衛門板)の序文執筆(五月、佐原にて)。門人榮亭馬笑(四代目竹本倉太夫)との縁か(棚橋『式亭三馬』)。

○九月から十月にかけて音羽町足袋屋結城屋の景物本『壳初足袋世界』(二冊、歌川豊国画、結城屋善助板)を執筆(頼原退蔵「三馬の広告文学」)。現存本が存在しないため刊行年は不明だが内容が恵比寿神と関係あるらしい事から、当年十月刊か(『黄表紙総覧』)。

○「本石町四丁目新道に転居して」(『式亭雜記』)とある。山の手側便々館湖鯉鮒撰の『狂歌袖玉集』(文化四年刊、大和屋久兵衛板)序文に「文化三とせといふとしの冬のなかば石町のやどりににおいて 式亭三馬しるす」と記すことからしても、文化三年のうちの転居と思われる。

文化四年、一八〇七、丁卯、三十二歳

○正月、左記の合巻を刊行。

『復讐娶唬谷』(六卷二冊、歌川豊国画、西宮新六板) 號

六卷六冊の黄表紙形式もある。

『式亭 箱根靈験賽復讐』(六卷二冊、歌川豊国画、西宮新六板)

○「作者画工番付」を烏亭焉馬、京伝らとともに板元に交渉、絶版処分へとさせたとする。(国立国会図書館編『貴重書解題

第十二巻書簡の部第二」二十・二十三)。番付は「辰正月二日より」として版元「東邑閣」。「辰」は文化五年なので、文化五年のことか。

○正月、景物本『壳初足袋世界』刊行か。

○当年刊と思われる咄本『江戸嬉笑』(二冊、榮亭馬笑・福亭三馬・古今亭三笑作、歌川国輝画)に序文。作者の三人は三馬門人。三馬は行司役で評言も載せる。

○当年刊、『狂歌袖玉集』(便々館湖鯉鮒撰、大和屋久兵衛板)に序文。

○前年に亡くなった市川白猿(五代目市川団十郎)の追悼集『追善数珠親玉』(二冊、烏亭焉馬編、上総屋利助(石渡利助)板)に詞書と狂歌一首が載る。

○従来、洒落本『船頭部屋』(二冊、猪牙散人作、勝川春竜画)が文化四年刊とされていたが、棚橋氏が『船頭部屋』が三馬作でないとし、その刊行年も文化末年ごろと推定した(棚橋『式亭三馬』)。

付記

本稿はもともと私の研究の手控えにもとづく。本田康雄『式亭三馬の研究』(笠間書院、昭和48)、棚橋正博『式亭三馬』(ベリかん社、平成2)の記述が骨子となっており、それに自分で調べたことを付け足し付け足して、研究に利用してきた。そのようなもので、『式亭三馬とその周辺』(新典社、平成23)を上梓するさいも、収録する気はまったくなかった。しかし、式亭三馬の研究を行う人は多くなく、長い間私が研究者の最若手だったが、気がつけば私も白髪が多くなり、年若い三馬の研究者も散見するようになったので、研究の助けとしく、公開を考えるようになった。幸い科学研究費の助成をいただいており、もういちど原本と照

らしあわしつ手控えを精査する余裕もできた。誤りを多く見つけることができ、いちおうは年譜稿として公開できる水準になったと思うが、まだまだ不足や間違いもあると思われる。ご批評をうけることも年譜稿公開の目的である。資料漏れや誤りを見つけた方は、遠慮なく

yoshimaru@human.mie-u.ac.jpまでお知らせいただきたい。

本稿は平成二四二二六年度科学研究費助成事業(学術研究助成基金(若手研究(B)))、課題番号二四七二二〇〇九二による成果の一部である。

〔よしまる かつや 本学教員〕